

書評

いのちの終わりに
どうかかわるか

- 編集 木澤義之／山本亮／浜野淳
- 定価 本体 4000 円＋税
- 発行 医学書院

評者

茨城県立中央病院・茨城県地域がんセンター
看護局長
がん看護専門看護師
角田直枝

これまで以上に、誰かの役に立てる
という幸福感を生む 1 冊いのちの終わりに、こんなに
たくさんの“できること”がある

木澤義之医師が中心となって編集・執筆した本書を、医師のみならず、その他の医療者にもぜひ読んでもらいたい。

私は看護師という立場で読んだとき、医師の視点や判断を知り、その上で医師とは異なる看護の役割も再認識した。例えば、死前喘鳴への対応では、「本書には書かれていないけれど、この時期の家族に私はこうする」と思いながら読んだ。

しかし、そんなことはどうでもよい。私が伝えたいことは、読者の立場によって読み方は違っていても、いのちの終わりにこんなにたくさんの“できること”があると気づく自己効力感の大切さだ。

治療を目指さない医療も、
価値ある医療

患者や利用者にいのちの終わりが近づくとき、もう何もできないと考える医療者が、今、まだ多い。日常の臨床では、「もう化学療法は無理なので、他にすることはない」とか、「心不全は治らないので、これ以上何もできない」などと説明する場面は、どこでも見られる光景であろう。確かに、治療を目指した医療から考えたら、この説明は誤りではない。

しかし、高齢者や慢性疾患患者が増加し、医療は治療だけを目指す時代ではなくなった。疾患と共存していく医療や、人生の最終段階の時期を穏やかに過ごすための医療を、医療者はもっと価値あるものとして捉えなければならない。

治療を目指せなくなることを医療の敗北だと捉えるひとがいたとしても、治療を目指さない医療だって、人生を豊かに

して、尊厳を大切にできる価値ある医療なのだ。

死＝不幸という概念からの解放

ところで、私はかつて、訪問看護師として在宅でのいのちの終わりに関わり、現在の看護局長という立場では、勤務する病院で月平均 60 人ほどのひとの人生が終わる。また、私はがん看護専門看護師であり、看護局長であっても個別の患者に関わることもあって、こうして原稿を書いているときも、数日前に亡くなったひとの顔が浮かぶ。

医師は多くのいのちの終わりに立ち会うし、看護師はいのちの終わりの生活に寄り添う。薬剤師も栄養士も療法士も医療ソーシャルワーカーも、医療者であれば皆、いのちの終わりに触れる。

いのちの終わりは、決して終わりだけではない。そのひとや家族が穏やかで尊重される時間を持てると、死のあとに幸せを残すことができる。身近なひとの死を体験したから命の貴さを認識し、家族の思いを再確認する。弱っていくひとに寄り添うから、できないことや失うことに力を貸すことができる自分にも気づく。こうした思いは、いのちの終わりのあとも、亡くなっていったひとの存在を大切にし続ける。そして、死生観・生命観・人生観・家族観など価値観を拡大し、死＝不幸という概念を解放するのだと思う。

本書は、医療者にとって、自分ができると世界の広がりを感じさせ、これまで以上に誰かの役に立てるという幸福感を生むのではないだろうか。